

あり、凝灰岩及び角閃石を含むものは在地系の土器の胎土にみられる特徴である。箱根町教育委員会谷口肇氏教示。

引用・参考文献

- 赤星直忠 1974 『神奈川県金子台遺跡』横須賀考古学会研究調査報告3 横須賀考古学会
- 1979 『神奈川県史』資料編20 考古資料 神奈川県
- 石野 瑛 1935 「足柄上郡山田村遺蹟と出土の土器」『武相叢書 考古収録』第2 武相考古学会
- 1939 「相模国屋山田村芭蕉住居址と金田村金子台遺跡」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告』第7集 神奈川県
- 大川清他編 1996 『日本土器事典』雄山閣
- 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 西川修一他 1997 『宮畑（No.34）遺跡 矢頭（No.35）遺跡 大久保（No.36）遺跡』かながわ考古学財団調査報告25 かながわ考古学財団
- 吉田 格 1958 「神奈川県中屋敷遺跡—所謂土偶形容器発掘遺跡の考察」『銅鐸』14 立正大学考古学会

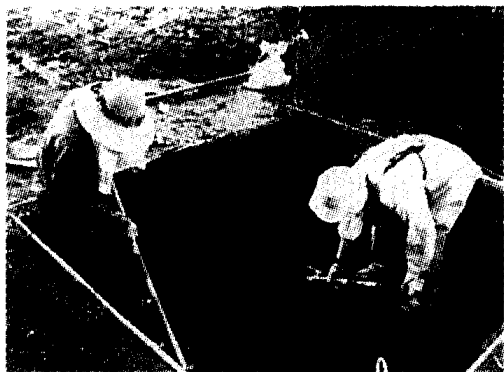


写真5 調査風景

おわりに

昭和女子大学が主体となって実施する国内での学術発掘は、今回が初めての試みであった。調査の実施にあたり、小宮操氏並びにご家族の方々にご理解とご配慮をいただいた。ここに記して深謝したい。また、調査準備から整理作業に至るまで、考古学研究会の学生諸氏の献身的な努力があったことをここに銘記する。

今後の調査に向けて、関係諸氏のご指導、ご教示を賜れば幸いである。

調査および整理作業において次の方々、諸機関にご協力、ご教示いただきました。記して感謝いたします（敬称略）。

秋本雅彦、井上賢、大井町教育委員会、大井町役場企画部、小川直裕、神奈川県教育委員会、金子弓絵、財団法人かながわ考古学財団、昭和女子大学学園本部・東明学林・大学事務局・生活環境学科、谷口肇、千葉敏朗、勅使河原彰、東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団、東村山市教育委員会、山本輝久

発掘参加者（1999年度の所属を示す）

小泉玲子（昭和女子大学日本文化史学科講師）、佐々木由香（同大学院生活機構研究科博士後期課程）、竹田純子・舘まりこ（同日本文化史学科4年）、今井明子・藤井恵・山口和泉（同3年）、石井寛子・大島美和子（同2年）、鈴木由貴子（同1年）

なお、整理作業は発掘参加者と安孫子千穂・後藤麻衣子（同2年）で行った。調査準備では、東嶋啓子・中村有香（同4年）の協力を得た。

註

（1） 中屋敷遺跡調査団組織（第1次）

顧問：櫻井 清彦（昭和女子大学大学院生活機構研究科教授、大井町史編集委員会委員長、大井町史編さん委員）

団 長：スチュアート ヘンリ（昭和女子大学大学院生活機構研究科教授）

副 団 長：杉山 博久（大井町史編集委員）

調査指導：山本 博也（昭和女子大学大学院生活機構研究科教授、大井町史編集委員）

御堂島 正（昭和女子大学日本文化史学科非常勤講師）

調査主任：小泉 玲子（昭和女子大学日本文化史学科講師）

調査員：佐々木由香（昭和女子大学大学院生活機構研究科博士後期課程）

調査補助員：日本文化史学科学生

（2） 土器の胎土中に金雲母及び石英を含むものは東海産の土器である可能性が

とんどない。時期不明。

6 調査の成果と今後の課題

従来中屋敷遺跡の年代は、縄文時代前期末葉、晩期後半、弥生時代初期と報告されてきた（吉田 1968）。

今回の調査成果として、TP 1 の 1 号土坑から弥生時代初期に比定される条痕文土器を主体とする数点の土器が出土したことがあげられる。TP 1 の位置は、縄文時代晩期後半から弥生時代初期の所産とされ、確実な時期決定がなされていない容器型土偶の出土地点付近であることから、容器型土偶との関連が推定できる。

縄文時代晩期から弥生時代初期は、付近の地域で資料の希薄な時期である。その中でも、遺跡の近くの矢頭遺跡では、炉跡とともに弥生時代初期の条痕文土器が検出されている。これらの土器は、谷口肇により「矢頭式」と提唱されている（西川他 1997）。この時期の条痕文土器は、胎土に金雲母、石英、凝灰岩、角閃石などの荒い粒子を顕著に含み、外面に施される条痕は植物を束ねたようなもので施文されるという特徴をもつ。⁽²⁾中屋敷遺跡で出土した条痕文土器も同様の特徴を備えており、「矢頭式」とほぼ同時期もしくはそれ以降の弥生時代初期に位置づけられる。また 1 号土坑中より 1 点のみの出土であるが、縄文時代末葉にさかのぼる可能性がある撚糸文土器も出土した。今回該期の資料が出土したことは、矢頭遺跡の資料と共に縄文時代から弥生時代の過渡期の研究に貴重な資料を追加することになった。

その他の土器では、いままで認知されていなかった縄文時代早期後半の土器が遺跡内で最も標高が高い TP 2 から、縄文時代中期前半の土器が南斜面にあたる TP 1 から出土したことがあげられる。

また、TP 2 の 1 層からの出土であるものの、今まで報告されていない石器未製品もしくは剥離痕跡を有する石が出土した。

弥生時代より後の時代の遺物では、中世から近世に比定される陶磁器破片が数点出土した。これらはすべて日用雑器として使用されていたものと思われ、中世から近世にかけてこの地に人々が居住していたことを推測することができる。また、表採資料であるが、土師器片を 1 点確認している。

このように今回の試掘調査では、縄文時代早期後半、中期前半、晩期末葉～弥生初期（中期？）、中世～近世の資料と、各時期の土層の堆積を確認することができた。地点ごとの出土遺物の時期的な差異は、遺跡内の地点による差異なのか、また集落が近くに存在しているのかなどを含めて、今後調査によって明らかにしていく必要がある。

今年度も中屋敷遺跡の調査範囲を拡大し、発掘調査を実施する予定である。今後も遺跡の年代および性格を明らかにしていきたい。

1層から出土。

7は茶色の鉄釉を施した播鉢である。小破片のため、櫛目の単位が不明である。時期不明であるが、江戸時代に比定されよう。TP1の1層から出土。

8は器種不明。内外面に鉄釉を施す。江戸時代に比定される。TP3の3層から出土。

9は染付輪花皿の口縁部である。口唇部に鉄絵具の口紅が付けられ、内面に呉須で文様が描かれる。19世紀代、近世末期に比定される。TP1の1層から出土。

10は染付の飯碗もしくは茶碗の口縁部である。19世紀代、近世末期に比定される。TP3の3層から出土。

〔金属〕

鉄破片がTP1の1層から2点、4層から1点の計3点出土している。時期不明。

〔石器未製品?〕(図5・写真4)

石器未製品または剥離痕跡を有する石(残核)がTP2の1層(地表面から-50cm)から1点出土している。平面形が三角形を呈し、表裏面に剥離の痕跡が認められ、剥離面に光沢を持つ。この光沢は加工の際に火を使用したために出来たと思われる。玉髄製もしくは石英製。玉髄製であるとすれば、神奈川県下で出土例がほ

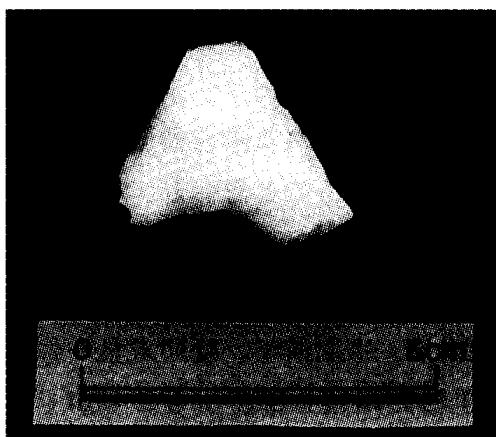


写真4 出土石器未製品?

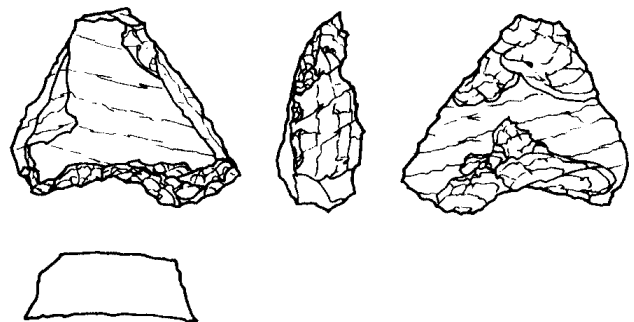


図5 出土石器未製品? 実測図

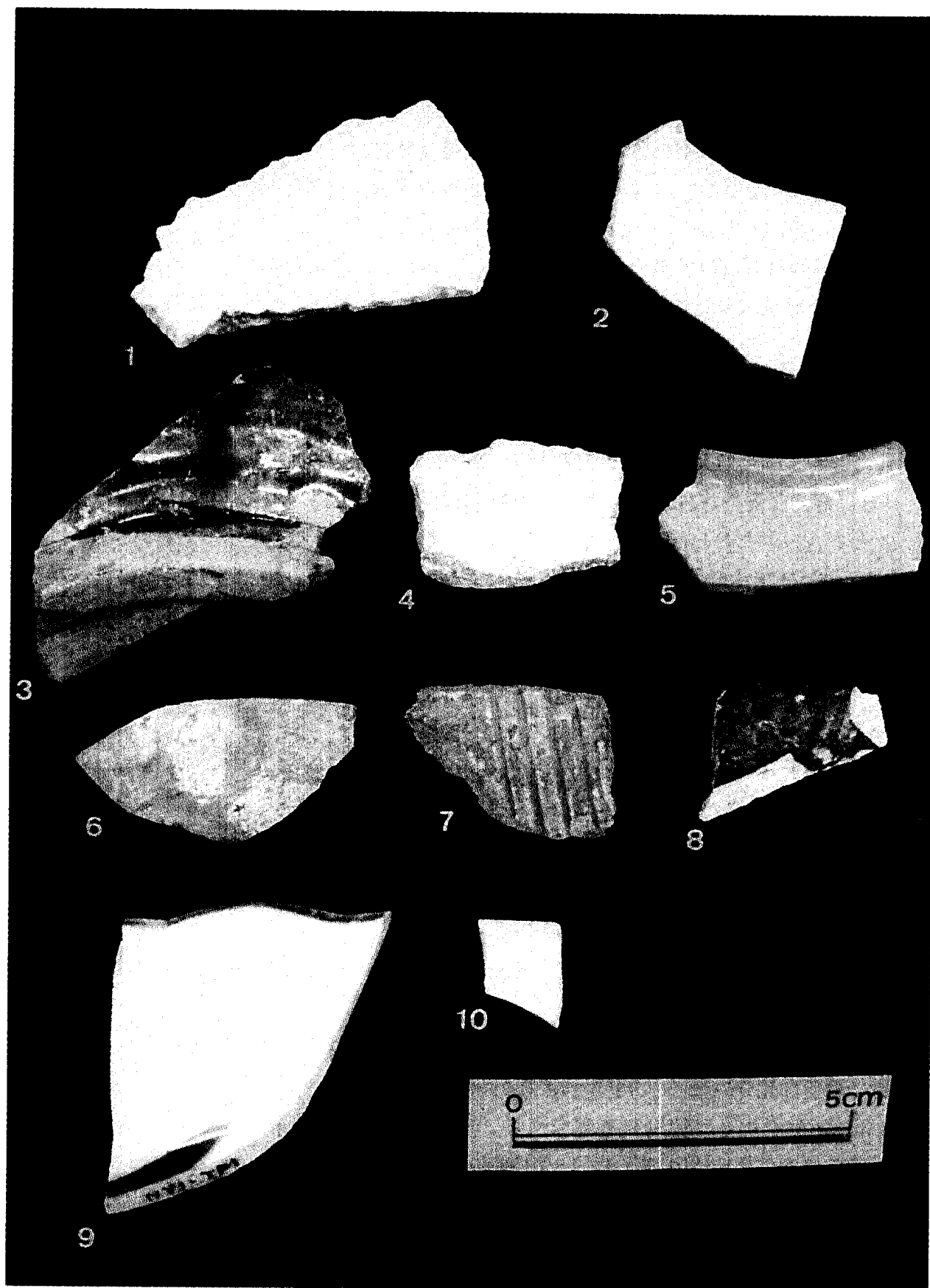


写真3 出土陶磁器

3は深鉢形土器の胴部破片である。地文縄文施文後、半截竹管による平行沈線で区画している。胎土中に金雲母を含む。縄文時代中期前半五領ガ台式併行に比定される。TP1の9層下部から出土。

4は深鉢形土器の胴部破片である。地文縄文施文後、半截竹管による平行沈線2本を単位とし、区画している。胎土中に金雲母を含む。縄文時代中期前半五領ガ台式併行に比定される。TP1の11層上部から出土。

5は深鉢形あるいは甕形土器の胴部破片である。地文を撚糸文とする。胎土中に角閃石・凝灰岩を含む。縄文時代末葉から弥生時代初期に比定される。TP1の1号土坑から出土。

6～8は甕形土器の胴部破片である。弱い条痕を横位もしくは横位に近い斜位に施文する。6は胎土中に凝灰岩・角閃石、7は金雲母・石英を含み、8は石英を顕著に含む。弥生時代初期に比定される。TP1の1号土坑から出土。

9は甕形土器の底部破片である。条痕文を縦位に施文する。弥生時代初期に比定される。石英などの混和材を多く含む。TP1の1号土坑から出土。

10・11は深鉢形あるいは甕形土器の同一個体片である。10は底部近くの胴部破片、11は底部破片である。地文を縄文とするが、作りが全体的に雑である。内面に炭化物が付着している。上記条痕文土器に伴う弥生時代初期に比定される。TP1の11層から出土。

12は壺形土器の頸部もしくは胴部破片である。羽状文を施文する。胎土中に石英を含む弥生初期～中期初頭に比定される。TP1の1層で出土したが、再堆積によるものと思われる。

【陶磁器】（写真3）

1から8までが陶器、9・10は磁器である。

1は灰釉を施した皿である。火力不足で白濁している。中世から近世初期に比定される。TP1の1層から出土。

2は透明釉を施した皿である。内面に沈線による圏線を施す。17世紀代、近世初期の肥前に比定される。TP3の4層から出土。

3は鉛釉を施した徳利の底部である。ロクロ成形。17世紀後半から18世紀初頭の瀬戸美濃に比定される。TP1の1層から出土。

4は灰釉を施した鉢もしくは片口鉢に比定される。17世紀後半から18世紀初頭に比定される。TP1の1層から出土。

5は銅緑釉を施した青土瓶の口縁部である。本来蓋とセットとなっているため、口唇部の拭き取りが観察できる。19世紀代、近世末期に比定される。TP1の1層から出土。

6は鉛釉を施した徳利の肩である。19世紀代、近世末期に比定される。TP2の

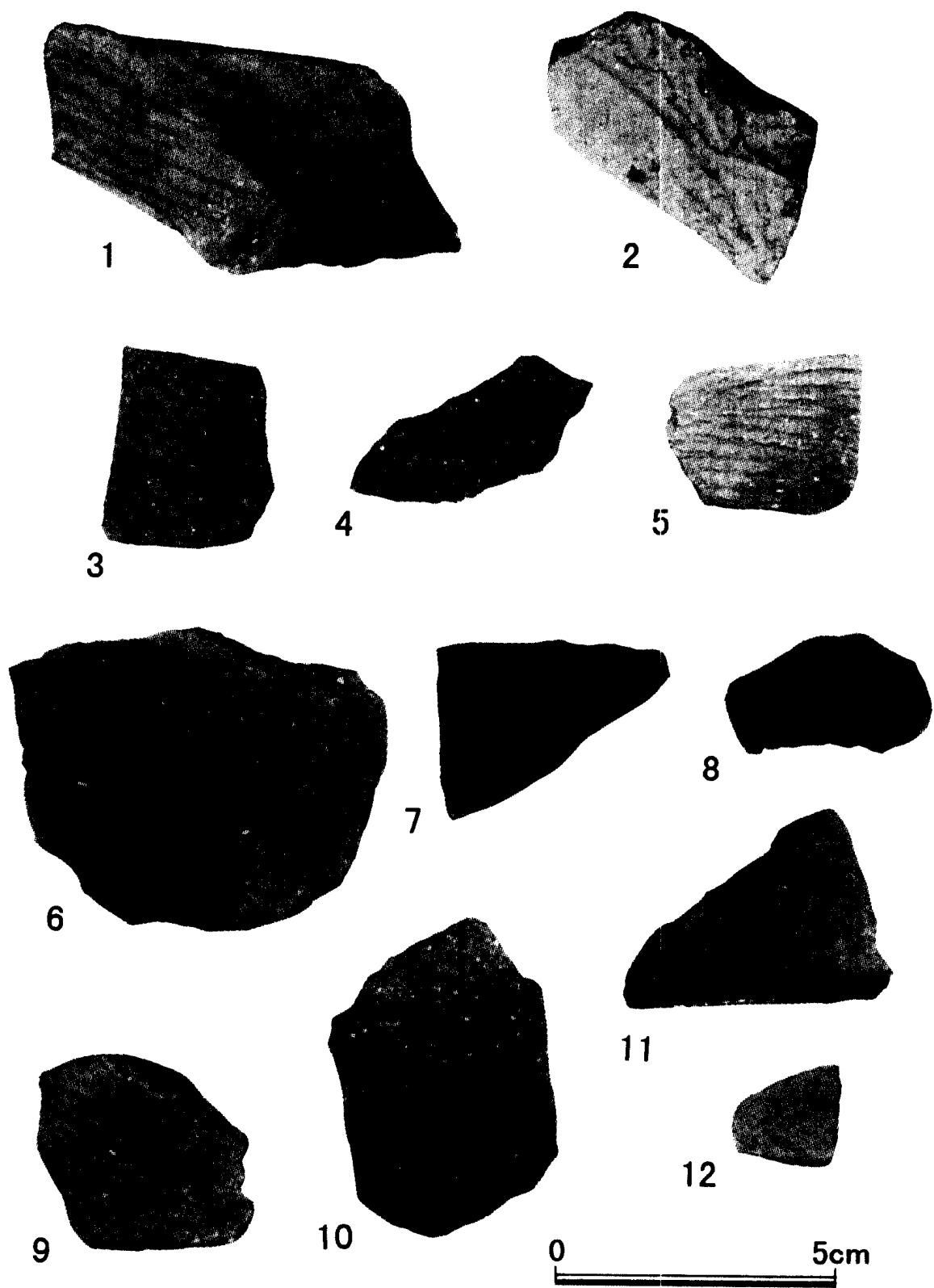


写真2 出土土器

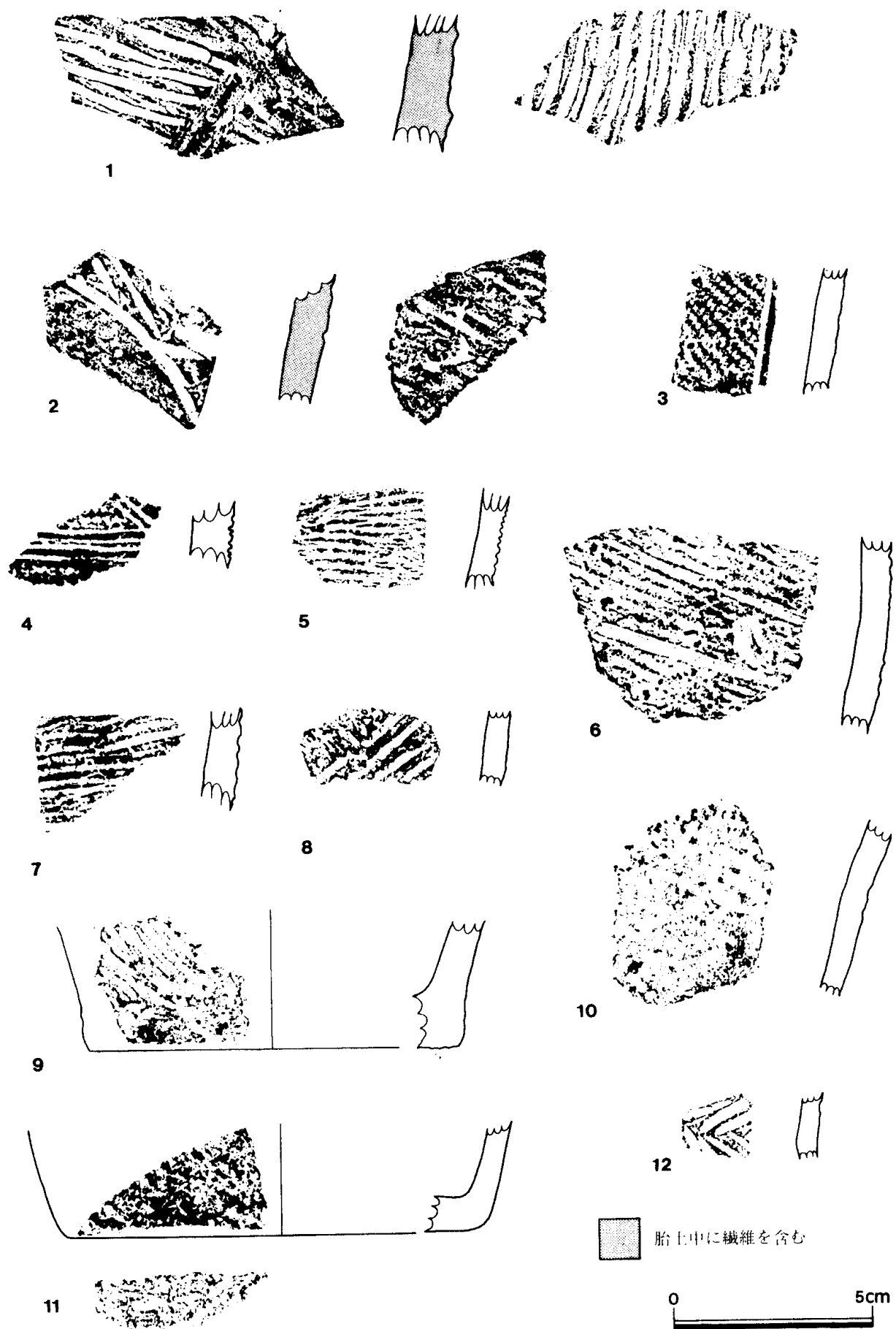


図4 出土土器実測図

表1 遺物出土傾向

TP1

| 層位/種別 | 土器 | 陶器 | 磁器 | 石器 | レキ | 金属 | 備考 |
|-------|----|----|----|----|----|----|----|
| 1層 | 1 | 6 | 1 | | 6 | 2 | |
| 3層 | 1 | | | | 1 | | |
| 4層 | 4 | | | | 1 | 1 | |
| 7層 | | | | | | | |
| 9層 | 1 | | | | 1 | | |
| 11層 | 3 | | | | | | |
| 12層 | | | | | 3 | | |
| 13層 | | | | | | | |
| 14層 | | | | | | | |
| 1号土坑 | 5 | | | | | | |
| 合計 | 15 | 6 | 1 | 0 | 12 | 3 | |

TP2

| 層位/種別 | 土器 | 陶器 | 磁器 | 石器 | レキ | 金属 | 備考 |
|-------|----|----|----|----|----|----|---------|
| 1層 | | 1 | | 1 | 4 | | |
| 2層 | | | | | | | 宝永スコリア層 |
| 10層 | | | | | | | |
| 11層 | 1 | | | | | | |
| 12層 | 2 | | | | 8 | | |
| 13層 | | | | | | | |
| 14層 | | | | | | | |
| 合計 | 3 | 1 | 0 | 0 | 12 | 0 | |

| | | | | | | | |
|---------|---|---|---|---|---|---|--|
| TP2周辺表探 | 9 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
|---------|---|---|---|---|---|---|--|

TP3

| 層位/種別 | 土器 | 陶器 | 磁器 | 石器 | レキ | 金属 | 備考 |
|-------|----|----|----|----|----|----|---------|
| 1層 | | | | | | | |
| 2層 | | | | | | | 宝永スコリア層 |
| 3層 | | 1 | 1 | | 6 | | |
| 4層 | | 1 | | | 7 | | |
| 合計 | 0 | 2 | 1 | 0 | 13 | 0 | |

4層以下出土遺物なし

今回の調査では、調査範囲が合計 12m²と限られていたが、TP 1 以外は縄文時代から弥生時代の包含層の堆積が良好ではないことが観察できた。TP 2 は、堆積が地表面からローム層まで約 1.0m と浅く、宝永スコリア下は 3 層から 9 層がなく、10 層下も薄い。また TP 3 は、宝永スコリアからローム層まで約 2.7m と非常に厚く堆積しているが、縄文時代から弥生時代に比定される包含層の堆積は後世の堆積土によって削られて薄く、遺物は出土していない。さらに TP 3 の土層断面の観察から、旧地形はかなり急角度の斜面であり、土器などの遺物が堆積しにくい状況であったことが推測できる。

遺構として、TP 1 より 1 号土坑 (PIT 1) が検出された。1 号土坑は 9 層を遺構確認面としたが、TP 1 北西隅の部分的な検出であること、また上部は後世に堆積した層によって破壊されていることから、遺構の平面的な範囲および性格は不明である。土坑内下層からは、弥生時代初期に比定される条痕文土器が数点出土している。しかし、近接する遺跡で、宝永スコリア以下の層は地割れなどの影響による層序の逆転や不整合面が多く、安定して堆積している所は極めて少ないと報告されていることから、1 号土坑については、今後検出地点を拡張して調査を行うなど、遺構であるかどうかを含めて慎重に検討する必要がある。

今回の調査は、関東ローム層まで掘り下げを行ったが、TP 2 においてローム層をさらに約 60cm 掘り下げ、部分的な掘り下げであるもののローム層の良好な堆積を確認している。中屋敷遺跡は神奈川県内を広く覆うテフラの供給火山である箱根および富士山に近接する立地にある。近接する遺跡においてテフラの堆積は、相模野台地と比べて極めて厚く良好に堆積していることが確認されているため、ローム層以下の調査は、今後検討していく課題である。

5 出土遺物

今回の調査で出土した遺物を種別ごとに掲げる。各ピットからの遺物出土傾向を表 1 に示す。

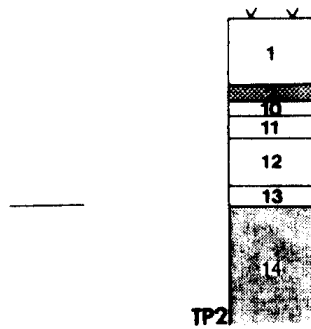
【土器】(図 4・写真 2)

今回出土した有文土器の主体は条痕文土器であるが、いずれも小破片である。ここでは、代表的な有文土器について時期別に概略を記述する。

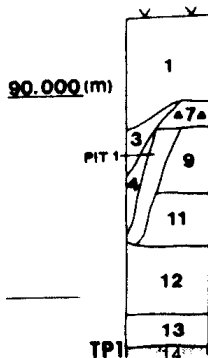
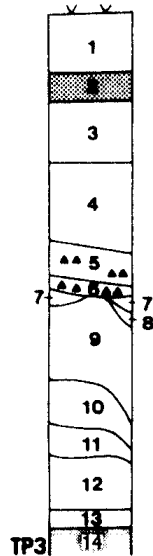
1 は深鉢形土器の胴部上半部破片である。表裏貝殻条痕文で、表面は細隆起線文で区画した後、集合沈線を充填している。胎土中に繊維を含む。縄文時代早期後半野島式に比定される。TP 2 の 12 層から出土。

2 は深鉢形土器の胴部破片である。表面は沈線区画内に同様の沈線を充填している。裏面は貝殻条痕文を施文している。胎土中に繊維および金雲母を含む。小破片なため全体の文様構成が不明であるが、縄文時代早期後半野島式、あるいは鶴ヶ島台式に比定される。TP 2 の 11 層から出土。

遺跡の基本層序



95.000(m)



宝永スコリア
火山灰
関東ローム層

- 1層 表土層(耕作土) 締りなし。径1mmの橙色・褐色・黒色スコリアを少量含む。
 - 2層 黒灰色スコリア層 径5mmの黒灰色スコリアを多く含む。S-25(宝永スコリア:AD1707年)。ただし、TP1では耕作および攪乱が深く、2層は検出されていない。TP3では、ブロック状にみられた。
 - 3層 褐色土層 径3mm以下の橙色・褐色・黒灰色スコリアを少量含む。径10mm以下の小礫を少量含む。締まっている。
 - 4層 褐色土層 径5mm以下の橙色・褐色・黒灰色スコリアを少量含む。径10mm以下の小礫を多く含む。締まっている。
 - 5層 明黄褐色スコリア層 径5mmの橙色・褐色スコリアを多く含む。良く締まっている。少量のパミスを含む。S-24-2(湯船第3スコリア)。
 - 6層 黄褐色土層 径15mmの褐色スコリアを少量、径5mmの褐色スコリア、径3mmの橙色スコリアを多く、少量のパミスを含む。締まっている。S-23もしくはS-22(湯船第2スコリア)。
 - 7層 明黄褐色スコリア層 径10mmの褐色スコリアを少量、径3mmの橙色・褐色スコリアを多く、少量のパミスを含む。締まっている。
 - 8層 暗褐色土層 径10mmの褐色スコリアを少量、径2mmの橙色・褐色スコリアを多く、少量のパミスを含む。径15mm以下の礫を多く含む。
 - 9層 黒褐色土層 径10mmの褐色スコリアを少量、径3mmの褐色・橙色スコリアを多く、径1mmの黒色スコリアを少量含む。締まっている。
 - 10層 黒褐色スコリア層 径2~3mmの橙色・褐色スコリアを多く含む。締まっている。
 - 11層 暗褐色土層 径1mmの黒灰色スコリアを少量、径2~3mmの橙色スコリアを少量含む。良く締まっており、やや粘性をおびる。
 - 12層 暗黄褐色土層 富士黒(FB)。径3~5mmの褐色・橙色スコリアを多く含む。径1mm以下の黒色スコリアを少量含む。
 - 13層 明黄褐色土層 漸移層。径2mmの黒色スコリアを多く含む。良好に締まっており、やや粘性をおびる。
 - 14層 黄褐色土層 関東ローム層(ソフトローム:LIS)。黒色・褐色スコリア、パミスを多く含む。極めて良好に締まっており、やや粘性をおびる。TP1では、直上から水が湧いた。
- 1号土坑(PIT1) 黒褐色スコリア層 褐色・橙色・黒色スコリアを多く含む。径10mm以下の礫を多く含む。良く締まっており、粘性をおびる。下部から弥生時代初期の土器が出土。

図3 遺跡の基本層序と土層柱状図

- 7月26日 参加者10名、小田急線新松田駅に集合。東明学林へ移動。部屋の設営、機材の点検。午後より各自機材を手に、徒歩にて中屋敷遺跡へ向かう。小宮氏に挨拶の後、測量班と発掘班に分かれて作業開始。測量班はレベル移動。発掘班はピット設定、写真撮影、TP1・TP3の表土剥ぎ。
- 7月27日 測量班基準点設定。発掘班TP1・TP3掘り下げ開始。
- 7月28日 測量班、調査区北側にレベル移動、トラバース杭設定。発掘班、TP1・TP3掘り下げ継続。
- 7月29日 測量班、トラバース測量。発掘班、TP1・TP3掘り下げ継続。
- 7月30日 測量班、トラバース測量。発掘班、TP1・TP3掘り下げ継続。TP2表土剥ぎ、掘り下げ開始。
- 7月31日 測量班、トラバース測量終了。発掘班、TP1・TP2・TP3掘り下げ継続。
- 8月1日 測量班、調査区見取り図作成。発掘班、TP2掘り下げ終了。写真撮影後、断面図作成。TP1・TP2掘り下げ継続。
- 8月2日 測量班、調査区見取り図作成終了。発掘班、TP1・TP3掘り下げ継続。
- 8月3日 TP1・TP3掘り下げ終了。写真撮影後、断面図作成。
- 8月4日 撤収。15時より庶務課の協力、トラックにて世田谷キャンパスへ機材、生活機材を搬出。TP1断面図注記、16時より埋め戻し。TP2断面図の修正、注記、午後埋め戻し。TP3断面図作成、注記、17時より埋め戻し。18時すべての作業終了。小宮氏宅に挨拶の後、完全撤収。

4 遺跡の基本層序と遺構

TP1～3における土層堆積の柱状図および基本層序を図3に示す。なお、火山灰の略記号は、近接する大久保遺跡の基本層序を参考にした（西川他1997）。

中屋敷遺跡の層序は、堆積土と出土遺物からおおよそ8区分される。すなわち、表土層（1層）、宝永スコリア層（2層）、褐色土層（3・4層）、明黄褐色～暗褐色土層（5～8層）、暗褐色～黒褐色土層（9～11層）、富士黒土層（12層）、漸移層（13層）、関東ローム層（14層）である。表土から約20cmで宝永年間（1707年）に堆積した宝永スコリアがみられた。しかし、層状に堆積していたのはTP2のみで、TP1では耕作によって削平され、TP3ではブロック状に堆積していた。3・4層は出土遺物から中世以降近世初期頃に堆積した土層と推定できる。5～8層は、火山灰、スコリアの堆積が層状またはブロック状（図中▲で示す）に顕著に見られた土層である。遺物は出土していない。9～11層は、縄文時代早期から弥生時代初期の遺物を包含する。12層は富士黒土層。TP2において縄文時代早期後半の土器が出土している。13層は漸移層、14層は関東ローム層にあたるが、遺物は出土していない。地表面からローム層までの深度はTP1で約1.7m、TP2で約1.0m、TP3で約2.7mであった。

～64年、1973年に発掘調査が実施され、縄文時代後期の配石遺構などが検出されている（石野 1939、神沢 1966、赤星 1974）。

1992・93年には、東名自動車道改築事業に伴い、新たに3遺跡が調査された。大井松田インターチェンジから東に約1.8kmの下り線側に宮畑（No.34）遺跡、同じく東に約1.5kmの上り線側に矢頭（No.35）遺跡、南東に約0.3kmの下り線側に大久保（No.36）遺跡が位置する。矢頭遺跡では、縄文時代前期の良好な遺物が出土し、異系統土器との共伴が確認されていることから、編年研究に重要な一石を投じている。また、縄文時代末葉～弥生時代初期の遺構・遺物もわずかではあるが確認されており、今まで資料数の少なかった時期の研究に貴重な資料を提供することとなった。くわえて、縄文時代前期の住居跡が地震による地割れの痕跡を残していたことでも話題となった。宮畑遺跡、大久保遺跡では縄文時代を中心とした遺構、遺物が検出されている（西川他 1997）。

大井町では、他に中世の篠窪館跡や縄文時代、古代、中世の遺物散布地が認められるが、発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。

3 調査の方法と経過

今回の調査は以下の方法で行った。調査範囲は小宮操氏所有地内とし、なるべく農作物に影響のない場所を選び、3ヶ所に2m×2mのピットを設定した（図2）。土偶発見地点西側の空き地にテストピット1（TP1）を設定した。地形的には南側斜面に立地する。TP1の北西約90mの畑に、テストピット2（TP2）を設定した。TP2は、本調査範囲で標高が最も高い平坦面に位置する。TP2の北東約50mにテストピット3（TP3）を設定した。TP3は北東に傾斜するキュウイフルーツ畑の中に位置する。

各ピットでは、遺構・遺物の検出を目的とし、土層を確認しながら掘り下げていった。ピットの位置及び調査地の見取り図作成については、宅地内に17本の杭を打ち、トラバース測量により実施した。遺構実測図・断面図の縮尺は1/20、微細な遺物の実測図は1/10とし、調査区の見取り図は1/200を併用した。出土遺物の取り上げ方法は、遣り方実測で行い、図化した遺物に通し番号を振り、他は一括して層位ごとに取り上げた。

調査期間中は、毎晩ミーティングを行い、調査状況・翌日の作業確認を行った。また、出土遺物の洗浄作業、図面整理も合わせて実施した。本格的な整理作業は、10月以降、昭和女子大学世田谷キャンパスにおいて、発掘参加者を中心に授業の合間に実施した。

以下調査の経過を日程順に記す。

7月25日 昭和女子大学庶務課の協力により、発掘機材、生活資材を宿舍となる東明学林へ搬入。

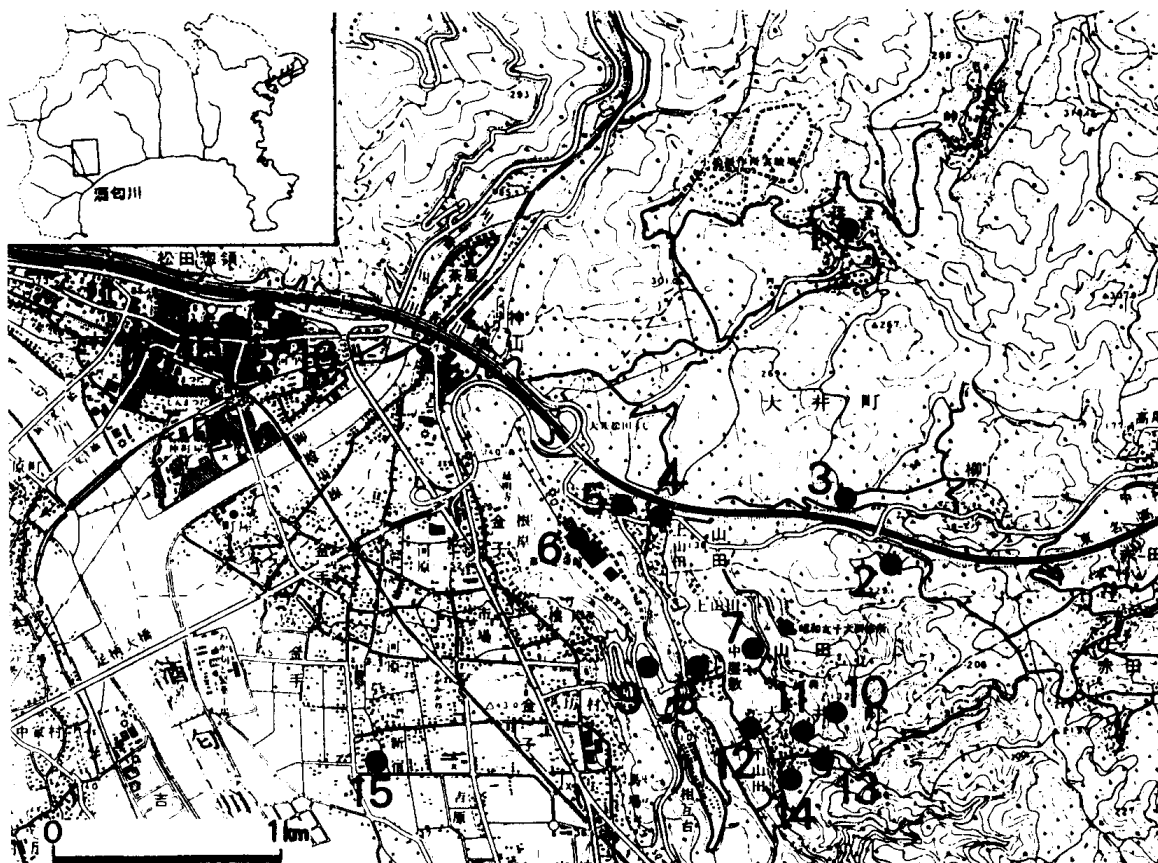


図1 遺跡の位置・周辺の遺跡

- | | | |
|------------|--------------------|-------------------|
| 1. 篠窪遺跡 | 2. 宮畑 (No. 34) 遺跡 | 3. 矢頭 (No. 35) 遺跡 |
| 4. 大井町17遺跡 | 5. 大久保 (No. 36) 遺跡 | 6. 金子台遺跡 |
| 7. 大井町3遺跡 | 8. 中屋敷遺跡 | 9. 大井町7遺跡 |
| | 10. 獅子久保遺跡 | 11. 大井町11遺跡 |
| | 12. 大神社境内遺跡 | 13. 大井町12遺跡 |
| | 14. 大井町8遺跡 | 15. 網島屋敷遺跡 |
| | 16. 大井町19遺跡 | 17. 大井町17遺跡 |
| | 18. 大井町26遺跡 | |

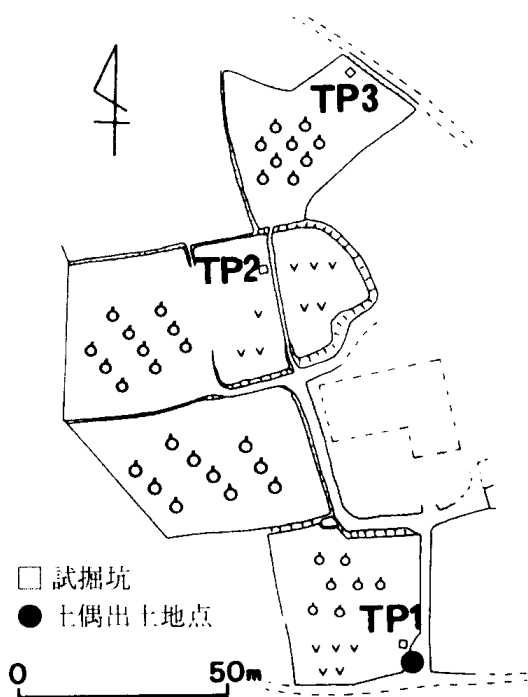


図2 遺跡見取り図



写真1 遺跡遠景

編集委員の杉山博久氏は作業を進める上で、中屋敷遺跡の重要性を認識し、遺跡の性格や年代をより明確にするため精査の必要性を痛感していた。町史に掲載する土偶の写真撮影立会いの折、地権者の小宮氏も調査について前向きな考えであることがわかり、発掘調査実施へ向けて具体的な話し合いが行われた。

そこで、昭和女子大学日本文化史学科は、考古学研究会を主体とし、大学院生及び学部生を中心とした中屋敷遺跡調査団を組織した。本調査団は、土層の状況を把握し、本遺跡の時代・性格を明らかにすることを主眼とする、今年度の試掘調査を計画した。6月23日、副団長の杉山と調査担当の小泉、佐々木が小宮氏宅へ伺い、今年度の調査目的、規模、組織等について説明したところ、小宮氏より快諾を得ることができた。同月、文化財保護法57条第1項にもとづき、発掘届を大井町教育委員会へ提出した。同年7月22日、小泉、館が小宮氏宅を訪問して発掘地の選定と最終打ち合わせを行った。同年7月25日より8月4日の10日間、試掘調査を実施した。

2 遺跡の地理的、歴史的環境 (図1)

中屋敷遺跡は、神奈川県西部、足柄上郡大井町の北東部に所在する (写真1)。御殿場線上大井駅から北方約1.3kmの場所にある。相模湾西部に面する西湘海岸からの直線距離は約5.7kmである。大井町は、面積約14.7km²、人口約1.5万人でひょうたんを特産とする。北は松田町、東は秦野市・中郡中井町、南は小田原市、西は足柄上郡開成町にそれぞれ接する。大井町の北東部は、大磯丘陵の西縁にあたる丘陵地形に立地し、畑や山林として利用されている。同町の南西部には、富士山東麓に水源を持つ酒匂川によって形成された足柄平野が広がる。

遺跡のある山田地区は大磯丘陵の西縁部にあたる。同丘陵と足柄平野東端の間には金子台と呼ばれる台地が形成されている。同台地の東端は断層面を呈し、その東側には酒匂川にほぼ平行して流れる菊川の支谷によって形成された谷地形が湾入している。中屋敷遺跡は、大磯丘陵がこの谷地形に下る西側斜面上の起伏地に立地している。標高は約90~97mである。1934年に容器形土偶が発見された地点は、菊川の小支谷によって形成された谷の南側斜面にあたる。遺跡は現在小宮操氏の所有地内にあり、畑、宅地として利用されている。

大井町での考古学的調査の嚆矢は、1934年の中屋敷遺跡の発掘調査であり、容器形土偶の発見で一躍注目されたことは上述の通りである。調査者は、当時、周辺遺跡の巡検も行い、旧小字油地では鎌倉時代の甕を見つけ、同獅子窪には地震のため天井・羨門が壊れた横穴墓を確認している。他にも、縄文土器、石斧、石棒などの存在を指摘しているが、場所の特定には至らず、詳細は不明である (石野1935)。

中屋敷遺跡の北西に位置する標高約120mの金子台には、金子台遺跡が立地する。現在、遺跡の大部分は第一生命保険相互会社の敷地内に含まれる。1938年、1962

神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第1次調査報告（1999年度）

佐々木 由 香
小 泉 玲 子

はじめに

本概報は、1999年度に神奈川県足柄上郡大井町で昭和女子大学が実施した試掘調査の報告である。以下、調査に至る経緯、遺跡の概要、調査の方法、調査の成果などについて報告する。

大井町には昭和女子大学の研修施設「東明学林」があることから、町と大学との関りは深く、今回の調査も、こうした経緯をふまえて実現した。調査地である小宮操氏の敷地は、昭和初期に土偶が出土したことから、神奈川県の遺跡台帳に中屋敷遺跡として登録されている。調査の実施にあたり昭和女子大学は中屋敷遺跡調査団を組織し、日本文化史学科の教員、学生を中心に作業を進めてきた。本概報は、佐々木、小泉で分担し、4～6を佐々木が、その他を小泉が担当した。

1 調査経緯と遺跡の概要

中屋敷遺跡は、神奈川県足柄上郡大井町山田643に所在し、1934年に、小宮柳太郎氏宅入口通路の拡幅工事の際、土偶が発見されたことで注目された遺跡である。土偶は、地表下約1.2mの深さから、うつ伏せの状態で見出された。顔面に入墨状の沈線文が施され、胸部に乳房を表現した半身像である。頭頂に開口部を持ち、胴部以下が膨らむ形で、底面は扁平で楕円形を呈する。内部は空洞となっており、容器形土偶と呼ばれている。土偶周辺には人骨の微細片が散布し、空洞になっている土偶の内部からも人骨の細片が検出された。土偶のすぐそばで、胴部に磨消工字文をめぐる縄文時代晩期後半の壺形土器1点が出土している（石野1935）。1939・40年に甲野勇は、土偶について、土偶内部の骨片は初生児のもので、歯・頭骨・長骨などを含むことを明らかにし、蔵骨器的な性格の強いものとした（甲野1939・40）。その後も、土偶はたびたび取り上げられ、年代については縄文時代晩期もしくは弥生時代初期として紹介されている。1958年に吉田格は、土偶発見地点の隣接地を調査し、縄文時代前期末葉の土器、弥生時代初期の条痕文土器数片を発掘している（吉田1958）。1961年に、土偶は国の重要文化財に指定された。現在は小宮操氏が管理・保管している。本遺跡の年代は、おおむね縄文時代晩期もしくは弥生時代初期とされるものの、遺跡の性格をはじめとする詳細が不明のまま今日に至っている。

昭和女子大学日本文化史学科では、大井町より委託を受け、後藤淑教授を委員長として大井町史の編纂作業に取り組んできた。委員長を引き継いだ櫻井清彦教授と、